

令和3年度 第1回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

|       |   |
|-------|---|
| 日 時   | 令和3年12月14日(火) 15:00~16:55   |
| 場 所   | 芦屋市立美術博物館 講義室   |
| 出席者   | <p>会 長 藪田 貫<br/>         副会長 岡 泰正<br/>         委 員 飯尾 由貴子<br/>         委 員 若林 敬子<br/>         委 員 安部 太一郎<br/>         委 員 星野 剛一</p>   |
| 欠 席 者 | <p>委 員 中島 幸夫<br/>         委 員 丹羽 洋文</p> <p>(芦屋市立美術博物館指定管理者)</p> <p>館 長 石井 茂(株式会社小学館集英社プロダクション)<br/>         学芸員 室井 康平(株式会社小学館集英社プロダクション)<br/>         学芸員 大槻 晃実(株式会社小学館集英社プロダクション)<br/>         学芸員 川原 百合恵(株式会社小学館集英社プロダクション)</p> <p>株式会社小学館集英社プロダクション 稲邊 英士<br/>         株式会社小学館集英社プロダクション 岩川 晋子<br/>         株式会社小学館集英社プロダクション 池野 美佳<br/>         グローバルコミュニティ株式会社 渋谷 真幸</p> <p>(事務局)</p> <p>社会教育部長 中西 勉<br/>         生涯学習課長 岩本 和加子<br/>         生涯学習課係長 竹村 忠洋<br/>         生涯学習課 石田 直也<br/>         生涯学習課 松本 淳子</p> |
| 事 務 局 | 生涯学習課   |
| 会議の公開 | ■ 公開  |
| 傍聴者数  | 0 人   |

1 会議次第

- (1) 社会教育部長あいさつ
- (2) 委嘱状交付・自己紹介
- (3) 報告

- 1) 令和3年度上半期事業報告について
- 2) 新型コロナウイルス感染症対策について
- 3) その他

(4) 議題

- 1) 展示状況について
- 2) その他

2 提出資料

- 資料1 会議次第
- 資料2 委員名簿
- 資料3 芦屋市立美術博物館2021年度事業報告書
- 資料4 芦屋市立美術博物館2021年度展覧会動員実績
- 資料5 芦屋市立美術博物館2021年度入館者数内訳
- 資料6 集客施設における感染症対策の取り組み
- 資料7 報告(3) その他 令和4年度 機械設備等改修工事(予定)について
- 資料8 徳川大阪城東六甲採石場400年記念講演会チラシ

3 審議内容

(藪田会長)

それでは、議事次第に従いまして進めさせていただきます。

昨日、兵庫県の文化懇話会という兵庫県下、芸術文化界関係者が集まれる会がございまして、藪館長が座長をされているのですが、そこに出席いたしました。斉藤知事が初めてお越しになる予定でしたが、県議会の最終日でコロナ対策の補正予算を巡って議論が長引いたためにお越しになれませんでした。コロナ対策について相当力を入れておられるということで、夕方まで会議があったということであり、ある意味、コロナ禍についてはまだまだこれからも続くという覚悟をしておられるということなのだと思います。その会は3つの分科会で議論し、最後に報告しあう形でしたが、ひとつ印象に残っているのが、阪神大震災以来、兵庫県にとって芸術文化を見るのが困難な状況が来ているとの意見です。コロナ禍の中で、今新しく生まれてきている芽、あるいは、古くなって変えていかなければならない問題など、全般的な問題が県下の芸術文化についてあるのではないかと。特に兵庫県は震災以降芸術文化を県政の柱において事業を進めて来られましたので、その伝統を引き継ぎながら、コロナ禍の下でもう一度兵庫県全体の芸術文化行政を展開していくという大きな時期に差し掛かっているのでは、というようなまとめがございました。芦屋の使命につきましても、このような状況の中でご奮闘されているかと思えますけれども、ここだけの問題ではなく広い意味で、広い世界で、そういう動きが出てきているので、そういう思いで議論して頂きたいと思えますし、担当されている方々もその思いでやっていただけたらと思っております。

それでは、報告事項が3件ございますので、一括して報告をお願いしたいと思います。

(事務局：岩本課長)

まず、(1) 令和3年度上半期事業報告、及び(2) 新型コロナウイルス感染症対策につきまして、石井館長から報告させていただきます。

(石井館長)

それでは令和3年度の事業報告をさせていただきます。

……………〈令和3年度事業報告の説明〉……………

続きまして学芸員の室井から(2)新型コロナウイルス感染症対策について説明させていただきます。

(室井学芸員)

……………〈現在の新型コロナウイルス感染症対策をガイドラインに沿って説明〉……………

(事務局：岩本課長)

続きまして、(3)その他につきまして、事務局の石田から説明させていただきます。

(事務局：石田)

……………〈その他 令和4年度機械設備等改修工事(予定)について説明〉……………

(事務局：岩本課長)

事務局からの報告は以上です。

(藪田会長)

ありがとうございました。3つまとめて報告していただきました。順番に少しご意見を賜りたいと思います。いかがでしょうか。

(若林委員)

先日コミスク連絡協議会がございまして、そこで「皆さんからご意見がありましたら、是非お聞かせください」ということでメンバーに投げかけさせていただきました。私も、こちらの委員に就任してもう何年にもなるのですが、いろいろ気付きをこの協議会で申し述べさせて頂いて、それを事務局が受けて、具体的に反映してもらっているか、というご質問がございました。

私が鮮明に覚えているのは、会下山遺跡とか他の遺跡から出てくる土器の破片がたくさんあるので、遺跡の展示写真のそばに置いて、身近に手で触れるようなコーナーを作ってみてはどうですかと。それと、キャプションが難しいので、分かり易くルビをふって、小学生とか中学生の方々に、大人もですね、分かり易いようなキャプションにしてはどうか。文字を大きくしたらどうですかと提案させて頂いた時に、次の展示にはそれが反映されていました。そういうことは取り上げて頂いていますが、一年を通しての企画に関しては意見を申し上げても、ほとんどそれは通らないです。こういうことがニーズに合っているんじゃないですかと申し上げても、なかなか一年を通しての企画には反映されていない。今年度に限って感じましたのは、非常に形而上学的な展示ばかりと感じました。それを市民の方々がどれぐらい受け入れられて、足を運んでみようという思いにさせているのか、その辺がちょっと私は疑問に思います。少し偏りすぎているかなというふうに私は思うんですが、皆さんはいかがお感じでしょうか。

(安部委員)

私もこの一年の中で、香川元太郎さんの迷路の展覧会、植松奎二さん、それからスポーツ展、コレクション展、開催されているものだいたい全て来させて頂きました。例えば、香川元太郎さんの迷路の絵本展ですが、これは本校の子ども達、図書室に本があるからよく分かっていて、実際に授業が終わった後も「行ってきたよ」と言っていました。子ども用のワークシートも「ワークシートもあったから、それもやってきました」という声を実際に子ども達から僕から言う前に言われました。実際に迷路に関しては、作品数もすごかったので見ごたえがあって、とても楽しかったなと思います。

植松奎二さん、それからスポーツ展に関しては、ちょっと子供が見るには難しいかなと思いました。ただ、現代アートであったり、インスタレーションとかいろんな作品があるので、子ども達は自分なりに感じ取ってそれを自分なりに消化していくところがあるので、見て難しいかなと思っても、それなりに子ども達はいろんな刺激を受けたりはしていると思います。

芦屋の時間大コレクション展は、かなり作品数もあって作品びっしりと壁になっている感じだったのでとても見ごたえがありました。ワークシートも用意されていて良かったなと思います。

最近の11月からあった「絵画はつづく 今日に向かって」ですけれども、学校にこのチラシを入れて頂いていたと思います。チラシには山崎つる子さんの作品の写真があって、子ども向けにわかるように解説が記載されていたのですが、当日行ってみたらワークシートがなかったように思います。学校用に配られているということはこのチラシを見て、子ども達は行きたいなど、見てみたいなど、本物を見てみたいという気持ちになると思うのですが、いざ、来てみたら作品はありませんが、ワークシートではなく鑑賞の手引きになっていたと思います。子ども向けの内容のワークシートがなかったので、チラシを見て来た子どもたちはこの鑑賞の手引きを見てという形になると、少し難しいかなと思いました。先ほど申しましたように子どもなりに色とかモダンテクニックとかを授業ではやったりするので、これ自分もやったことがあるとか、それぞれ感じるものはあると思います。ただ、子ども向けのワークシートは、全ての展覧会には難しいかもしれないですけども、学校向けにチラシを配布されるのであれば作って頂けたらなと思います。

歴史の方では、若林さんが言われていたように、触れるもの、何回かこの会で言わせてもらいましたが、触れる展示があったらいいかなというのは感じています。保存上難しいところがあるかも知れないですけども、学校に昔のポンプがあったりして、山手にもあったり、浜風にも何か昔の道具があったりするのです、そういったものは子どもが触られます。また、場所的にもうちょっと手前の方に歴史の展示物が出た方がいいかなという話も、前回と、その前ぐらいも出ていると思います。

(星野委員)

スポーツ展見させて貰いましたが、芦屋の現代史をスポーツの切り口で迎える展示としました。個々の展示には、モノの展示に加えて、関連する人物の顔写真が添えられており、ヒトの顔が見える展示で、身近で親近感も湧く展示としました。会場では、中学生くらいの女の子が来て、なわとびの展示の前で三人並んで記念写真を撮っていたり、芦屋高校の現役野球部員が優勝旗を覗き込んでいたり、いつもは見かけない人が来られてるなぁと感じました。そういう意味では、今回の展示は、新しい層を発掘した展示になっていると思いました。更に、ギャラリートークに参加された方からは、「展示されてる〇〇さんの息子さんを、私知っとる」との話も飛び出したりと、やは

りいつもとは異なる顧客様層を掘り起こした展示と思いました。

コレクション展は学芸員さんの解説は、抽象画を前にして、「これは、とても絵には見えませんよねえ！」との切り出しで始まり、思わず話に引き込まれてしまいました。本当に上手く聴衆の心を掴んだお話を聞かせてもらって非常に楽しかったです。

歴史展示は、藪田先生から「芦屋の子供にとっては、芦屋の歴史を学ぶ唯一の場所だからしっかり考えないといけない」という話をお聞きした所でしたので、今回の歴史展示の改善は非常にありがたいお話と思います。つい先日の文化の日は、無料入館という事もあり、多くの方が見えられました。歴史展示への人の流れを見ていて感じたのは、入口がちょっとわかりにくいですね。なんか壁の裏に入っていく感じになる。館としてのバランスがあるのかもしれないけど、入口がわからない事には、いくら展示だけを改善しても不十分になりますので、この際に、入口も一緒に何か考えて欲しいと思います。

先生から、「歴史展示を考える上では近隣の歴史博物館をよく見て勉強しなさい」といった話もお聞きしましたので、見るだけなら私にも出来ると思って行って来ました。あちこち廻って感じたのは、「芦屋の特徴は、展示スペースが何しろ狭い、展示解説が文字のみで取っ付きにくい、入館料が有料でしかも高い」の3点です。展示室にはやっぱり、子どもが見てなんかちょっと楽しい所とか、一回目に見学した際に刷り込むような、そんな工夫とか仕掛けみたいがあつたらいいなと思いました。以前の協議会で飯尾委員が、鳥の埴輪なんかを上手く活用してキャラクターを作ったらどうですかと話されてましたが、面白い提案と思いました。

訪れた「近隣の博物館の多くは単独の歴史博物館で、どこもだいたい入館料は無料です」。芦屋と似通った構造の明石文化博物館も神戸市立博物館も一階の歴史常設展示は無料です。芦屋は歴史と美術の二部門からなる美術博物館ですが、中には歴史展示だけ覗いてみたいという方もおられると思います。しかし、現状の入館料設定では、歴史展示だけ覗いてみたいという方にとっては、非常に割高な入館料を負担する事になります。繰り返しになりますが、「芦屋とよく似た形態の明石文化博物館、神戸市立博物館では、二階の企画展示は有料ですが、一階の歴史展示は無料開放という対応をされてます。」美博も、何か良い手だてを考えて戴ければなあと思います。

(藪田会長)

ここまでで博物館側から何かご回答ございませんか。

(石井館長)

貴重なご意見ありがとうございました。展示は、現代美術ですので解説が難しいということがあります。ただ、当館の特徴でもあるので、もう少し表現ですとか解説の工夫が必要かなと思います。スポーツ展も、企画としてはスポーツの歴史が長い芦屋の歴史を、スポーツで展示したいという思いで、若林さんにもご協力いただきながら地域の方々との提携ですとか、東京にも出張して日本サッカーミュージアムと交渉し、サッカーの女子選手のユニホームですとかいろいろなものをお借りしてきました。またフォーミュラーカーを呼んでのイベントですとか手は尽くしたのですが、展覧会の意図と動員というのが中々結びつかなかった現実があります。

やはりお子さんが観て楽しいものなのか、それをうまく動員に繋げられないかという思いを持っております。お子さんが来たいと思えば家族でいらっしゃいますので、その辺をもう少し上げられ

たらという思いでやりましたが、動員的には難しかったのかなということは、実際、ご意見としていただいております。特にスポーツ展はひとつの挑戦で、芦屋の歴史ならではという思いがありましたけれども、残念ながら、我々としてももう一歩、その辺は残念な結果となりました。

その後のコレクション展としては、当館が持っているコレクションがたくさんございますので、それを展示していくということを意識しております。やはりコレクションは基本になりますので、見せ方はいろいろと工夫してステップアップできているかなと考えています。

その他、お子さんの動員、どうアピールするのかという課題がありました。これは館としてしなければならぬことですし、コレクション展は一定の来場者数がありますが、もう少し、親子連れですとか、動員できなければいけなかったのではと、そういう風な反省があります。

(岡副会長)

所蔵品、コレクションだけで突っ走っていけるかというのは、なかなか美術博物館の美術館としての役割としても、一般の人を呼ぶというところは、前衛だけで突っ走るのは辛いものがあると思います。それはそれですごい意義があるのですよ。だから、「具体」はちゃんと説明しないといけないし、作家も顕彰しないといけないし、芦屋発祥というオリジンを打ち出さないといけないんですね。それはアイデンティティだと。それはしないと、尼崎や大阪や兵庫に持っていかれてしまって、発祥地としての意味を失われていく。発祥の地としてせつかく美術博物館を作ったのだから、それを守っていかないといけない。それを芦屋市民が完全に理解して、バックアップしていきましょうというのは、時間がかかるから、それはもうくりかえしての教育しかないのですよね。ただ、それだけをずっと一本でやると、閑古鳥が鳴いている状態になるので、今お話があったように、前衛の形而上学的な問題の美術とかはたいせつだけれど、わかりやすい口当たりのいい展覧会もあわせてやる。前衛芸術は既存の美意識を拒否するところから始まるわけで、反芸術的な動きなのですよね。足で描いたりすることもそうだし、多分これは、現代美術は、芸術的なのというより、つまり美意識というものをいかに新しいものに作り変えるかということ、美術概念の美意識を打ち壊すことになる、破壊行為になるわけなのです。いつも言っていますが、小出楯重も含めて、絵画の伝統と日本画の伝統が普通にあって、その前衛と伝統を並列して出せば良いのではないのでしょうか。一つの展示室を前衛でスペースを取ってしまうと、両立させるところがなかなか難しいのではないかな。両立させないといけないのだけれども、例えば学芸員として、ここをどう見せるかというときに、やはり一般の人が来ていただけるような仕掛け、ひとつは教育であるし、ひとつは先生方もおっしゃったように子ども達にどのように理解させるかですね。私の勤めている美術館でも、常にそれを考えています。どのようにしたら子どもたちに理解してもらえるかということと、口当たりのいいものを混ぜていかないといけない。前衛のものと、それと、前衛を出した時でも、わかりやすい絵画というか、要するに反芸術的でない絵画ですね、だれもがひれ伏すような美しいものを出されたらいいと思います。そうしないと、なんかちょっと物足りないという感じに終わるかなと思います。今の展覧会も立派です。でも、来た人がその芸術理念を理解しようとするのは一部です。学生とか、大学院生とか、前衛美術大好きな人以外は、なかなかついていけないところがあるかも知れない。

スポーツ展は、僕としては勉強になりました。松岡修造が小林一三の後裔など、勉強になったんで面白かったんですけど、僕はオリンピックの当て込みだと思っていたので、コロナで大変だなと思ってしまいました。その中で、よく頑張られたと思います。

コレクション展って基本的に前衛的なものを強調せざるを得ないところがありますが、そこはもうちょっと伝統的なものに。なぜ、工芸とかもっと出ないのかなと思ったりしています。ご担当がいらっしやらないのか、いろいろと原因はあると思いますが。

(飯尾委員)

今されている村上三郎展は資料から丹念に紹介されていて、すごく勉強になりました。こちらは現代美術をいつもコンスタントに紹介されていて、コレクションの活用という意味で素晴らしいなと思っております。私事ですがこの秋に富山県美術館の運営会議に出席させて頂く機会がありまして、その時に富山県立美術館のコレクションをどのように展示していくかについて雪山館長がおっしゃっていたのですが、学芸員は自分の美術館のコレクションを見慣れているので、どうしても同じような展示になってしまうと。コレクションを別の観点から構成して展覧会をするために、ゲストのキュレーターをお招きして、コレクションを別の目で見てもらって展覧会にしてもらおう。そうすると、コレクションそのものが、生きてきて新しい見方ができるというようなことをおっしゃって、とても感銘を受けました。現在、姫路市立美術館で日比野克彦さんが、キュレーションをされて、姫路市立美術館のコレクションとご自分の創作とを併せて展示されており、同じ美術館のコレクションでも、視点をかえることで別の作品のように見えて非常に新鮮な印象を受けました。雪山館長のお話を聞いて、ゲストキュレーターというアイディアはコレクションを活かすためによい手法だと感じています。コロナでなかなか海外とか、遠方からの借用が難しいので、コレクションというものをどのように活用していくかというのがこれからの美術館の課題だと思います。コレクションを別の視点から見るという意味でこちらの美術館は、素晴らしいコレクションがあるので、このような考え方も一つヒントにして頂ければいいのかなと思います。あと、広報に関しても、せっかく良い展覧会をしておられるので、すでにされておられると思いますが SNS の発信ですとか、そのようなことも積極的にされたらどうかと思いました。

(藪田会長)

博物館法で義務付けられているので、どの館も館報を発刊されていますが、実は私は館長になってから、館報は毎年毎年変えています。充実させています。なぜかというアウトラインしか出ていない館報では10年後になった時には、ほとんどわからない数字しか出てこないから。何が達成されて何が達成されていないのか書かれていないから。すべて数字でしか判断できていない。数字ってというのは、今回のコロナのように、絶対数字があがらない状況になっているときに、いくら頑張っても上がらないわけですよ。そうすると、数字で目標を追求してもダメですよ。じゃあ、その時には、何で追及するのか。おそらく、全体の展示を通して考えられたのだし、目標とされたはずなので、それがどうであったかということが加わらなきゃならないと思うのです。そういうことを考えたときに、今回のデータとして出ているものは、ある意味でいうと、基礎数字だと思います。しかし、先ほども言いましたように、去年から今年、コロナが全体として襲っているときに展示をやった、やれなかったということが、まずある。やる状態になった時にそこで何を目標にしてやるのか。何を勝ち取るのかっていうことが、おそらく館内では、議論されていると思う。その上でやってみて、最終的にこの数字だけ出ると、数字で議論されるということになると思うので、今後ずっと残っていく資料の作り方のところをもう少し議論された方がいいと思う。

例えば、星野さんは数が少なかったけど、スポーツ展やった時に今まで来てなかった人が来てい

るというようなことをおっしゃったわけですから、それが、本来目標にされていたのか、たまたまそうなったのかっていうことでは、全然動機づけが違ふと僕は思います。そのデータを世代が変わっても人が変わっても、読み取れるような内容にしておかなければならないということで、特に僕は学芸員には、できるだけデータを細かく書け、一人だけのデータだけでなく二人目のデータやコメントを入れてもらえということをしています。そうでないとやったことの成果が数字だけで、還元されない形になっていくと、博物館としては自殺行為だと思うんですね。「誰にどういう思いでどういう状況で伝えたのか」ということとか、「全員に、大人から子供まで全員にあたる」ということは中々難しいということは、担当者が経験していることだと思うので、その情報の把握を行政も含めて館の事業とされた方がいいと僕は思います。そうでないと、このコロナがどういう状況になるかわかりませんが、元に戻ったという形になっていくとは限らないし、その時に、何が元に戻って、何が元に戻ってないかということを目指して把握するってことが、とても大事だと思います。美博が持っている理念と合わせてそれをどう今の中で実現されていくのか、その中でこの状況がどうであったか、ということだと私は思いますので、資料の作られ方に少しこだわりを持った方がいいと思います。

それから、芦屋で難しいのは、芦屋らしさということをおっしゃっていましたが、今回の展示と見て、やっぱり「具体」の作品など、僕とても面白かったんです。芦屋らしいなと思って。村上さんの展示で面白かったのは、写真とか、日記、メモがいっぱい置いてある。これって多分、美術ではいらんことだと思います。僕ら、歴史の眼から見ると、それが置いてあることで一挙にその作品が時代の座標軸の中に入っていくのですよね。そういうことから考えれば、歴史と美術というのは、僕はうまく入っているなと。前にやられた吉原さんの展示なんかよりはるかに今回の方が、村上三郎という個人を通じて、日本の戦前、戦後、特に戦後の、戦後といっても今おおざっぱに言っていますが、ものすごく時代が変化しているわけなので、50年代から70年代までの間ってすごく変化していますよね。その辺がその補足資料でもって説明されていたと思う。そこがすごく面白いと思う。そういう意味で言うと、これは、歴史展示でもあると僕は思いました。だから、それが意図した展示であるならば、とてもいいことだと思う。現代美術を優先しながら、そこに歴史的な要素を写真とか本に残されたメモとか、そういったもので展示しているという手法を取られたのだとすれば、これは「具体」の見方としては、面白い展示の仕方ではないかなというふうに思う。今日が一番の感想です。

現代美術となると、現代って、いつからいつまでが現代か、生まれた人によって違います。我々は、戦後すぐでも現代と思っているけども、子ども達の現代は万博以降が現代なんですよ。そういうことを考えたときに、その中の歴史的なスパンは何なのかということ、子どもも大人も明かそうとすると、例えば細かい年表があつて、僕から見るととてもいい年表だと思うけれども、多分おおざっぱに理解している人には、あんな細かい年表出されたら「分からない」という感想になるかと思ひます。その辺も議論されたうえで中高生が見たときにも村上さんの人生のアウトラインと作品がつながるような年表にするのか、僕らみたいなあるいは先生方みたいな専門家が見て分かるような年表にするのか。その目標地点というのはもうちょっと議論された方がいいかな。何回も何回もここで「具体」の展示をやられる中で、「具体」というものに対してここで学ぶ「芦屋での学び方」っていうのが、多分出来上がってくると思ひます。それが県美で見るのとも違ふ、大阪でみるのともまた違ふという芦屋スタイルでの見せ方っていうのが成熟してくれば、おそらくビクターも増えてくるのではないかと思ひます。その辺の「企画する側」「獲得したこと」「課題」という



ことを、その都度その都度どう認識するかということというのは専門家もおられることだし、見に来られている人達もいるんで、そこをここで確認すると。その素材を皆さん側から提供するということがされるには、ちょっと今出ているデータはアバウトすぎる。というのが、私の印象です。

(岡副会長)

余力があれば、今先生がおっしゃっていたような、50年代の芦屋の特集展示があつて、村上三郎の、混乱していてとにかく新しいことをやらなきゃと常にピリピリしているような感覚と、その時代の空気と、芦屋の例えば商店街のチラシみたいなものを出すというのは、面白かったりする。それをオーバーラップできるように歴史展示を、特集展示を変える。全部を変えるわけではないですよ。芦屋のある時代に特化する。それはなかなか大変なことですけども、広告を写真に撮るとか、アップするとかでもいいんだけど、それでもその時代史を補完することができるので、下の展示と上の村上三郎とが一緒に見られるということでも構わない。村上三郎の陳列で面白かったのは、その時代の広告がものすごく古くて、やっていることが超前衛的なことをやっていて、すごい時代の先取り感が強いのですよね。ちょっとケースにあると目の悪い年配者には見にくいけど、判読しようにも薄いですし読もうと思っても読めない展示もありましたけど。

(若林委員)

歴史資料展示室について、「報告(3)その他」のところの、「歴史資料展示室整備(予定)3理由(経緯)」というところで、「芦屋の歴史を学ぶ場」としての役割に重点を置く。ということが述べられています。今回、展示が変わったなと思って拝見したのですけれども、はっきり言って古いものが並べてあるだけ。「こんなのあったよな」「あったよね、懐かしいね」というゆうようなものが、ただ、並べてあるだけだなという感じがしました。芦屋があれだけスポーツ展で、スポーツの草分けって言われるような、近代スポーツの草分けって言われるような方々の古いお写真とか道具とか、たくさん集められていました。本当に素晴らしいなと思いましたけれども、子ども達の興味関心を引き付けようと思ったら、ああゆうものを展示できないかなと思います。あれ全部、返されたと思いますが、野球なり、テニスなり、サッカーなり、ちょっと展示できたら子ども達も目を輝かせそうな気がするんです。あと石臼が一個ありましたけれども、あの臼って高座の滝に行くまでの道に、石垣にたくさん埋め込んであります。その写真が欲しかった。あの石臼の上にあの光景の写真があればよかったと思います。

(藪田会長)

3の「機械設備等改修工事(予定)」について、それと、「歴史資料展示室整備(予定)」が出ておりますが、これは最終的に、期間が決まるのは、いつ頃になるのですか、

(事務局：岩本課長)

先ほどの説明でも申し上げましたように、3月の議会で予算が決定してまいりまして、そのころには、一定スケジュールというのも固まっております。

(藪田会長)

この休館中にこの協議会は、開催予定なのですか。

(事務局：岩本課長)

休館中におきましても、進捗状況ですとか、次年度の予定などもございますので、会議は開かせていただきたいと思います。

(藪田会長)

歴史資料展示室の規模では、企画展が難しいと書いてありますが、規模の問題ってハードなので難しいのですが、何か工夫できませんかね。

(事務局：岩本課長)

この度の常設展示化ですけれども、情報量をもっと多くして、一度の来館で、芦屋のいろんな歴史を知って頂きたいという試みですが、一年間を通してまったく変わらないというのも面白みがございませんので、一部のエリアにつきましては、展示内容を変える工夫をして、というのを設けたいなと思っております。

(藪田会長)

というより、建物全体を使って、一部常設展示的な歴史展示がどこかでできる、先ほど、商店街の話がありましたが、そういう写真となると早くても明治、ほとんど大正以降になると思うので、芦屋の景観みたいなものとかそういったものとかを、例えば写真コーナーで語るとかみたいな形にすればどうかと思います。あの部屋だけで歴史展示の常設っていうのは、さすがに難しいかなと思いますので、館全体を使って歴史展示、特に近現代のところができないかなとか、もうちょっと建物全体の空間構成をお考えになってやられたらどうかという気がします。そうでないと、「具体」とかこの特色を出そうとすると、戦後史の展示が大事だと私は思っているのですが、例えば今、カムカムエブリバディという朝ドラをやっていますが、あれ面白いのが、戦争になると英会話がなくなるということなんですよ。そんなことは、年表には書いてないのですよ。戦争が始まったことは書いてあるが、生活環境は書いていない。でも、戦争が始まったことはすごくよく分かる。年表に書いてあることをもっと具体的にさせるためには、写真であったり、物であったり、誰かの小説の一節であったり、文学館的な手法でも歴史館的な手法でも写真館的なものであってもいいですけど、知恵を絞って、芦屋の場合は現代のところをどう展示するかっていうのは、江戸時代までのところの水車を含めた会下山から始まる展示と、また別のものとしてお考えにならないと絶対そこには入らないような気がする。そのところと根本的な問題だと思うのですけれども知恵を絞られる、まだちょっと時間があるので知恵を絞ってみられて学芸員の方々も考えられたらという気がします。

(事務局：竹村係長)

おっしゃる通り、芦屋の場合は、近代以降が一つの大きな歴史になっております。その中で写真がすごい情報量としては大きいというのは間違いないですけれども、展示スペースのこともあって、今私たちの方で考えておりますのが、ディスプレイによる動画コンテンツもそうですけれども、他にも、芦屋市、美博などで収蔵されている写真資料をデジタル化している途中ですって、デジタル化したデータを実物ではないですけれども、見られるように出来ないかなとか、取り組んでいるとこ

ろです。いずれにしろ近現代の歴史は勉強不足で、まだまだ難しいので、また調査研究していきたいと思います。

(藪田会長)

私は尼崎歴史博物館は、うまくされていると思います。とてもよくされていると思いますね、教室を使いながら。最後の公害のところも、本当にうまくやっておられると思います。そこは、芦屋版も、ひとつあっていいかなと思いますので、もうちょっと検討されたらいかがでしょうか。

それでは4番目の議題に入りたいと思います。展示状況について事務局から説明をお願いいたします。

(事務局：岩本課長)

議題1 展示状況について協議を頂きます前に、現在の展示についての趣旨、狙いにつきまして担当学芸員の方から説明をさせていただきます。

…………… 〈担当学芸員 展示の説明〉 ……………

(藪田会長)

ありがとうございました。8点ほど、今回のポイントを喋っていただきました。まだ、始まったばかりですけど、どうですか。10日ほどたったのかな。

(担当学芸員)

はい、すでに開催したイベントでは定員を超えるぐらい来てくださったりとか、学校の団体、大学生の団体が来てくださったりとか、関係者の方が来てくださったりという反応はあります。ただ、一般の方がまだ少ないというのがあるので、一般の方に向けてまずは足を運んでもらうような仕掛けを出来たらいいかなと思っています。

(若林委員)

観覧させて貰った時に必ずアンケートがついていますけれども、これはどのように活用されていますか。

(担当学芸員)

最後に全部まとめて集計・報告に使ってしまして、毎日チェックして、直したほうが良い指摘があればその都度直しています。キャプションが分かりにくかったとか、誤字脱字の指摘があれば直したりですね。

(若林委員)

今回に限らず毎回これがついていますよね、これは、活用しなければ、何の役にも立たないのでもっともっと、皆さんの声を拾っていただきたいと思っています。

(岡副会長)

今回、図録はないのですか。

(担当学芸員)

販売予定ですが、展示風景などを撮影する関係で完成に至っておらず、現在作成中です。

(岡副会長)

それ予約販売とか、予約とか取らないの？

(担当学芸員)

予約を取りたいと思っているのですが、現在は価格が決まっていないため予約が取れていません。

(岡副会長)

図録作らないと記録が残らないし、あなたの業績も残らないし、館の記録も残らないし、図録は売れないかもしれないけど、予約販売だけでもしとかなないと。送料持ってあげるから送ります、とかしないともったいないですよ、どんどん日経っていったら。「具体美術」というのは、芦屋を代表するものになってきて、わかりにくいとか、難しいとか、訳わからないとか、いろんな言葉があるんですけども、あえて言えば、独創的なものしか残らないのですよ。人の模倣をした芸術、ただ口当たりのいいだけのものは残らないです。やっぱり独創的なものが残るのでね。なぜ「具体」はこのように言われたかというのは、反芸術的な側面を持つものだけれども、吉原さんが誰もやってないことをというのが大事で、表面だけ見たら無茶苦茶に見えるんだけど、時代を先取りして無茶苦茶しないといけない理由が、彼としたら理論があって、そうして時代とせめぎあっている。自分自身がやっていることが、正しいだろうかとか、葛藤する哲学的な側面がある。頭が大きい、哲学的な側面が大きい芸術活動ですね。村上三郎さんのように絵画化してないというか、絵になっていないというか、絵として見ようと思うとなんか爆発ばかりですごい反芸術的作品が強い。でも、それを後付けていかないといけないのだけど。ただ、何度も言うのですが、それに導くのはやっぱり導くためのわかりやすい後押しがないと芦屋市民はずっと置いて行かれていく感じがするでしょうね。それを心配します。小磯良平のような分かり易い絵と違うからね。取り扱いが難しい。それと先生おっしゃるように、入館者を増やすということも難しい。図録はとにかく早く作られて今から予約とられて、それが一つの重要なテキストになると思います。私なんかは、展示からでは読めない。字がちっちゃかったり、薄かったりすると。図録で見なくちゃいけないし、資料数も多いので。

(飯尾委員)

「具体」の展示は、私どもも常々課題とさせて頂いておまして、初対面で「具体」に対峙するとわかり難いというのがありますが、先ほど藪田館長がおっしゃったように、現代美術を資料とともに見せることによって、この時代にこういう表現があったと納得できる、わかったような気になるところがあるので、「具体」の展示に関してひとつのこたえとなるのではと思います。

資料展示は、非常に面白かったです。よくあれだけ全部取っておかれたなと思います、新聞なども。

(担当学芸員)

広告の裏にも、結構重要なことが書かれていたり、それもまとめて全部置いておられます。

(岡副会長)

でも、それが大阪にいったんだよね。中之島にいったんだよね。

(担当学芸員)

そうですね。中之島で、あちらはアーキピスト、アーカイヴの専門家がいるので、後々一般公開していくということで、移管されています。

(岡副会長)

まあ、残念な。

(薮田会長)

僕、ひとつだけ心配なんだけど、プリントした写真、あれ2月まで置いておいたら丸まってくるのじゃないのかな。

(岡副会長)

仮止めしていましたね。

(担当学芸員)

かなり固い紙にプリントされているので、資料にストレスがかからないものについては、できるだけ四隅で固定しています。

(岡副会長)

ガラスのケサンの受けを置けばいいんじゃない。

(薮田会長)

あるいは紙を切って、横に置いておくぐらいで。どうしたって気温が高くなってくる、暖房が入ってくると。縛りつけるのは良くないと思うんだけど、あのままやっているとどんどん丸まってくると思うけどな。所蔵者に相談されたらいいと思いますが。

(岡副会長)

マイラテープで止めていたから、マイラテープで止めればどうですか。止めてあげるだけでもずいぶん違うから。プラスチックの板でもいいし。

(薮田会長)

あるいは四角に紙切ってその上をテープで止めたってかまわないから。それだけちょっと気になりました。

(担当学芸員)

対応します。ありがとうございました。

(安部委員)

資料の話がたくさん出ているんですけども、僕も見させていただいて作品のキャプションに年齢が書いているって、新鮮な感じがしました。この絵は、この年齢ぐらいの時に描いたんだって。やっぱり絵を描く人は、そういうところも気になると思うんですね、自分と同じ歳ぐらいに描いたんやとか、そういうところも気になると思う。子供もそうだと思います。大人もこどもも年齢があるというのはすごくポイントになる。キャプションの一部に小さく年齢が書いてありましたが、それはすごく大きいポイントやなというのは感じました。それと当番表であったり、メモがたくさんあったので、この作品の裏側に、こういうやり取りがあったんだとか、そういう風な気づきがたくさんある展示でもあったので、この村上三郎さんってすごく面白かったなと思いました。

それで紙を破ったりとか、子ども達の活動、造形遊びというのがあるんですね。その場所とか、その素材からどういう風に作品作り、じゃなくて自分のイメージしたものを広げていく活動とかあるんですけども、そういうところにも通じるものがあるし、あと童美展の村上三郎さん審査員されていたので、教育関係者が見てもこの人のやつなんやなど、繋がりがいろんなどころであったのでそういう意味で面白かったです。

(星野委員長)

村上三郎展では、作品と当時のメモ等の関連資料が並列的に展示され、云わば美術と歴史資料がうまく組み合わせたり、面白い展示と思いました。当時の展覧会の当番表等には著名な画家の名前がリストアップされ、これらの歴史資料のおかげで、絵画作品だけでは思い浮かばない村上画伯の人物像もイメージ出来ました。以前、藪田先生から歴史展示を一人の学芸員だけで考えるのは荷が重いので、皆で考えた方が良くのお話がありましたが、何事も一人で考えるよりも皆で考えた方が良いアイデアも浮かぶと思います。今回の村上三郎展の様に、美術と歴史の組み合わせ、美術部門、歴史部門の相互乗り入れが進めば、もっともっと魅力的な展示になると思いますので、頑張ってくださいと思います。

(藪田会長)

はい、ありがとうございました。来春2月までありますので、スタートしたばかりです。あと2か月頑張ってやっていただければと思います。

はい、では最後のその他に、進みたいと思いますが、事務局から何かございますか。

(事務局：岩本課長)

事務局からは、特にございません。

(藪田会長)

それでは、一応5時までの予定でございましたけれども議事を全て済ませていただきましたので、これで終わりにしたいと思うのですが、よろしいでしょうか。何か最後におっしゃりたいことございますか。

(岡副委員)

ディスプレイの改修のところで、どこかの会社とか、デザイナーなどに聞かれるとか、外からの意見を聞いて、どういう風にパネルを、新しい壁をつくるとか、デザイナーが入るとかトータルメディアの会社が入るとか、そういうのはないのですね。そういうお考えじゃなくて、誰かがデザインをトータルで見るのではなく、大改修よりはむしろ、ハードなものを改修するのがメインなのですね。

(岩本課長)

はい、展示の件につきましては、どの様な手法がとれるのかというを研究していきたいと思っております、ある程度、業者さんのお知恵を拝借して、業務委託という形のものでいくのか、といったところにつきましては、今後方法を検討していきたいと思っております。

(岡副委員長)

ハードの建築会社がやる問題、空調工事なんかの問題に、ソフト面の実際に映像を見せたりとか、そういうものを入れると、一部だけやったって全然変わった感じがなくて、8か月休んでいたのに何も変わってないとか、前と同じと言われてしまいますよ。だから「ここはメリットですよ」「変わりましたよ」というところにお金を傾注しないと、中は触れませんでしたとかでは許してもらえない。だから、それはお金の中のやりくりなんですから、絶対何か言われるから、変わってないということにならないように、そこをできるだけ我々が申しあげたことを実現できるように、業者さんのコンペであるにしても、中は中でデザイナーさんが入るようなやり方にしてもらいたいと思います。予算も工期も大変だからというのは、よくわかるのですけれども、ちょっとそこは、要望として、最後言っときます。

(藪田会長)

とても大事なことをご指摘頂いていると思いますので、事務局のほうでしっかりと伺ってください。ではこれで本日の協議事項がすべて終わりましたので、閉会とさせていただきます。ご苦労さまでした。